

【やや黄色い熱をおびた旅人】

4

## 戦車の墓場

1997年7月

アスマラ  
(エリトリア)

原田宗典

朝六時起床。

目覚めて、一旦はベッドの上に体を起こしたものの、極めて体調悪し。昨日からの高山病じみた頭痛とだるさが、まだ続いている。横になったままディレクターのT君の部屋に電話をして、その旨を告げると、午前中の取材は撮影班だけで出かけるつもりであるとのこと。聞けばD嬢からも今さつき電話が入って、私とまったく同じ症状で体調を崩し、午前中の取材をキャンセルしたいと申し出てきたらしい。昨日別れ際に、彼女の顔色が悪かったことを反芻し、気の毒に思う。アスマラの空港で初めて会った時から、常に若々しく潑刺としていたD嬢だが、実はどこか無理をしていたのかもしれない。何しろ彼女は、撮影で緊張する以前に、

もっと大きなストレスを抱えているはずだった。

D嬢は二十一歳で、東大在学中の学生である。その名前がたまたま私の娘と同じであることに、最初は驚かされた。しかしインタビューを重ねるにつれて、今度は彼女の聡明さに驚かされることとなった。前もって貰った資料には、彼女が今春、史上最年少で司法試験に合格した、という快挙が記されていた。とにかく私みたいに鈍い頭の持主には想像もできないほど、彼女は頭が良いのだ。そしてその能力を若き独立国のために使うべく、アスマラに滞在しているのだ。彼女が初めてエリトリアを訪れたのは二年ほど前、青年海外協力隊に参加したのがきっかけだったという。おそらくその時点で、何か心に期するものがあつたのだろう。帰国後、一発で司法試験に通ると、再び彼女は単身エリトリアを訪れた。

この独立したばかりの小国が、アメリカの力を借りずに、自力で憲法を制定するつもりだと知って、一役かおうというのである。

「勉強させて貰うつもりで来ました」

D嬢は遠慮がちにそう言つて、はにかむばかりなのだが、彼女の知識がエリトリアという国の奥深いところで役立ち、人々の未来に影響を与えるであろうことは確かだ。それにしても小国とは言え、一国の憲法を制定する上で必要とされる能力が、弱冠二十一歳の彼女に備わっているというのだから凄い。現在、彼女はこの国の法務省（と言っても二階建ての古い小学校のような建物だが）の中に一室を与えられ、本格的に仕事を始めつつあるところだ。昨日私はその殺風景な部屋を訪ね、短いインタビューを済ませた後、彼女に伴われて、エリトリアの法務大臣と面

会した。大臣は四十代後半の堂々と太った女性で、黄色と黒の柄のムーミミみたいなワンピースを着ているせいか、一見まじない師のような印象があった。紹介されて、握手を交わした後、本来なら私が法務大臣にインタビューすべきところだが、一体何を訊いたらいいのか見当もつかなかった。しかも英語で。私が戸惑い、口籠もっているのを見てとると、隣にいたD嬢が助け舟を出してくれた。私に代わって、流暢な英語を駆使し、訊くべきことをすべて訊いてくれたのである。最初に会った時から感じていたのだが、彼女の美しさは、頭の回転数に比例しているらしい。彼女が考えれば考えるほど、その表情は引き締まってきて、輝きを増すようだった。私は異国の法務大臣を相手に、丁々発止のやりとりをするD嬢の横顔を眺め、彼女が自分の娘と同じ名である不思議を、改め

て思った。

しかしながらそんなふうにはスーパーウーマンを地でいく彼女も、この頭痛とだるさには勝てなかったらしい。大丈夫だろうか。頭が良い分、頭痛も凡人のそれよりずっと激しく、堪えがたいものなのではなからうか。と、余計な心配をしながら私はアスピリンを二錠口に含み、洗面所へ行って、エビアンのペットボトルの水で飲み下した。ベッドに戻ってから、そういうえば鏡に張りついてた忌まわしい蛾の姿がなかったことに気づく。室内にいやしないだろうなと思って、辺りをくまなく見回す———ありがたいことに、目の届く範囲に蛾の姿はなかった。私はほっと胸を撫で下ろし、改めてベッドに身を任した。枕は相変わらずどこか獣臭く、目をつぶると、昨夜私の眠りを妨げた「イズント・シー・ラヴリ

イ」のフレーズが耳元に甦ってくるようだった。その曲調とともにD嬢の横顔を反芻しながら、私は眠った。短かったが、思ったよりも深い眠りだった。

午前十時。改めて目覚めると、頭痛もだるさも嘘のように消えていた。アスピリンが効いたのか、それとも私の軀がようやく環境に慣れたのか。理由は分からないが、とにかく私はすっきりと目覚めた。同時に、自分がかかなり空腹であることに気づく。考えてみれば昨日、昼食に茹ですぎたパスタを食べてから後、何も口にしていない。相変わらず蛾の影に怯えながら身支度を済ませ、私は部屋を後にした。

午前十時半。ホテルの二階にあるメインダイニングで遅い朝食をとる。客は私一人きりで、応対にあたるウエイトレスも一人きりだった。とこ

ろがこのウエイトレスというのが、どうにも要領をえない。

「目玉焼きを頼む」

と何度言つて聞かせても、ゆで卵を持ってくるのである。わざわざ目玉焼きの絵をナプキンに描いて見せても、オーケーオーケーと言いながらゆで卵を持ってくる。違う、私が欲しいのは目玉焼きだ。殻を割つて卵の中身を焼くんだよ。身振り手振りで説明しても、彼女は「今度こそ分かりました」という顔で一旦厨房に引っ込んだかと思うと、やっぱりゆで卵を持ってくるのだ。そんな寸劇じみたことを三回も繰り返したところで、私は観念して、ゆで卵を食べることにした。悔しいけど、美味かった。空腹だったせいもあるう。私は現金にももう一個、ゆで卵を注文した。するとウエイトレスは嬉しそうに頷いて、固いライ麦パンとバ



ターを持ってくるのだった。私はもう何も言わずにパンをむしり、バターをつけて食べた。不味かった。

惘然としているところへ人の声と足音が響いて、客が入ってきた。四人組の黒人である。彼らはウエイトレスの案内も待たずに、窓際の広いテーブルにつくと、大声で談笑を交わし始めた。四人とも、きちんとアイロンのかかった黒いスーツを着ている。ネクタイが派手なところを見ると、結婚式か何かの祝い事に出席するつもりなのだろう。四人はまず赤ワインで乾杯し、顔を見合わすと、やけに楽しげな笑い声を立てるのだった。もしかしたら彼らは、昨夜一階のラウンジで「イズント・シー・ラヴリー」を演奏していた生バンドのメンバーではなからうか。ふとそんな気がした。というのも彼ら四人が、どこかしらやくざな雰囲気

を漂わせていたからだ。地元のエリトリア人とは何かが違う——例えば  
つい数年前まで敵対していたエチオピア人なのではないか？ 私は彼ら  
に対するウエイトレスの反応を盗み見たのだが、その無表情な顔からは  
何も読み取れなかった。やがて彼女は四人前のパスタをわざわざワゴン  
に載せて、運んできた。四人は申し合わせたようにナプキンの角を喉元  
に差し入れ、菱形の前掛けで胸元を覆って、大盛りのパスタを平らげた。  
そして残りのワインを各々のグラスに均等に注ぐと、もう一度乾杯して  
飲み干し、あつという間にレストランを出ていった。その間私はポット  
に入ったコーヒーを二杯飲み、煙草を三本吸った。彼らがいなくなると、  
急に店内の空気が萎えるように感じられた。

しばらくして、ホテルの真向かいにあるカテドラルの鐘が、華やかに

鳴り出した。時計を見ると、ちょうど正午だった。

やはり結婚式があつたのだらう——遠い歓声と拍手の音が、かすかに聞こえてくる。しかしながら窓外に広がる空は、華やかな鐘の音に水をさすような曇天である。ぐずぐずと濁った鈍色の空の下に、カテドラルの尖塔が見える。

これは雨になるな。

私はそう思った。地元ガイドのマコーネン氏の話だと、エリトリアは今、雨期に差しかかっているのだそうだ。道理で毎日、一度は雨が降る。あつけらかんと晴れ上がっていても、わずか五分で暗雲が立ち籠め、土を穿つほど大粒の雨が降り出したりするのだ。ただしそういう大雨ほど、止むのも早い。いわゆるスコールというやつなのだらう。三十分も降る

と、もうここはこれでよしと言わんばかりに、雨雲はどこへともなく立ち去ってしまう。憎めない雨、とカメラマンのA君は言っていたが、確かにその通り。厄介なのは、今、窓外に眺められる鈍色の空から降ってくる雨だ。本格的な雨期の到来を恐れ、備えようとする人々をあざ笑い、密かに嫌がらせをするかのような小雨。おそらくは今日の午後一杯降り続きそうな雨のことを思うと、私は少なからず憂鬱になった。

部屋へ戻っても気が滅入るだけなので、レストランを後にした私はその足で一階のロビーに下り、表へ出た。雨が降り出す前に、アスマラの町を歩いてみようと思ったのである。見知らぬ町を徘徊するのは、旅の楽しみのひとつと言っている。今までに訪れたどの旅先でも、私は滞在中に必ず一度は町中を徘徊してきた。散歩と呼ぶにはあまりにも気忙し

い足取りで、闇雲に歩き回るだけのことだが、とにかく町中に自分の足跡を残してくれば、それで不思議と気が済むのである。当然アスマラの町もいずれは歩き回ってやるつもりでいたのだが、今がその時というわけだ。

陰鬱な曇天の下、カテドラル正面の舗道には、今さっき新婚夫婦の車を送り出してやったばかりの参会者たちが、興奮さめやらぬ顔つきで談笑している。それを横目で眺めながら、私は適当な方角に向かって歩き出した。無目的に、ただ闇雲に歩く。沈んだオレンジ色が、アスマラの町の基調である。私の視界のほとんどすべてを、町のオレンジ色と空の鈍色が占めている。どうにも陰気な散歩だった。町中には信号もなく、車の通りも疎らなので、私は一度も立ち止まることなく、存分に歩き回

った。三十分ほどだろうか——しかしその間、私の気を惹くようなものは何一つ目につかなかった。強いて挙げるなら、町角の雑貨屋らしき店のショウケースの中に、ミッキーマウスのお面が飾つてあるのを見かけたことだろうか。ディズニー氏が見たら卒倒しかねないほどデッサンの狂った代物だが、ミッキーマウスに間違いない。こんな地の果てでも持て囃されているのかと思うと、私はミッキーマウスの可愛らしさの中に、何か不気味なものがあるのを感じてしまった。正しく、明るく、楽しいミッキー。まるでアメリカそのもののようなこのキャラクターが、世界中の至るところで愛嬌をふりまいているのだ。否定することを許さない可愛らしさ、とでも言おうか。誰もがミッキーマウスを愛さなければならぬ——そう強いられているような気がして、何だか鬱陶しい。私は

デッサンの狂ったミッキーマウスのお面を思い浮かべながら、アスマラの町中を闇雲に歩き回った。そしてほどなくホテルの前の通りまで戻ってきた。

カテドラルの付近にはもう参会者の姿もなく、今度は葬式でも始まるかのような、沈んだ空気が漂っていた。私はふと思い出して、ジャンパールのポケットからスケッチブックと筆ペンを取り出し、その場にしゃがみ込んだ。曇天を背景にしたカテドラルの佇まいを、描いてみようかと思ったのである。膝を机にしてスケッチブックを構え、短時間に集中して筆を動かす。下手糞ながらも大まかな形を描き終えたところで、ふと周囲に気をやると、十人近い子供たちが私のことを遠巻きに眺めていた。日本人というだけでも珍しい存在なのに、その上私は絵を描いたりして

いたわけだから、彼らの注意を惹かぬはずはない。手元のスケッチブックに注がれる幾つもの視線は、私を動揺させ、緊張させた。本当はすぐにでもその場から立ち去りたかったのだが、そうしたら子供たちをがっかりさせてしまうようにも思えて、腰が上がらなかつた。私はこわばつた笑みを浮かべて、再びスケッチブックに向かつた。見られているという意識が、私を懸命にさせた。十五分ほどかけて仕上げると、私は「よし」と言つて立ち上がり、その絵を高く掲げて周囲の子供たちに見せてやった。遠慮がちだが拍手と、笑顔が返つてきたので、私はほつとしてスケッチブックを閉じた。そして今さら頬を赤らめながら、ホテルに向かつて歩き出した。

午後一時。私がホテルに戻つたところへ、ちょうどスタッフたちが帰



つてきた。郊外まで行って、授業の一環として植林に精を出す中高生の姿を撮ってきたのだという。昼食がてら打ち合わせをと請われて、私はまたホテル二階のメインダイニングを訪れることになった。もちろん腹はまだ減ってなかったので、紅茶を注文する。そういえばあの要領をえないウエイトレスの姿はなく、代わりに如何にも手際よさそうな細身のウエイターが二人、忙しそうに立ち働いている。A君はまた性懲りもなくインジエラを注文した。T君とN氏は、茹ですぎで不味いと分かっていたながらも、パスタを注文した。三人とも、午前中の撮影がきつかったのか、疲労感を漂わせていて、言葉少なだった。

「プノンペン行きのエアー、まだ飛んでないみたいですね」

T君は昨日の昼食の時と同じことを言った。まだ十日も先のことだが、

私はタイのバンコクでアジア班の撮影スタッフと合流し、カンボジアへと赴く予定であった。ところがごく最近、プノンペン市街で銃撃戦が起きたために、航空機が軒並み欠航となってしまったのだ。T君はそれを心配して、毎日東京の放送局に問い合わせたり、先にバンコク入りしているアジア班のディレクターK君と連絡をとったりしていた。しかし私はその件に関しては、気を揉むまいと決めていた。そんなことを心配しても始まらない。なるようにしかならないのだ、と私は諦観していた。

午後二時。私たち一行は、ホテルを後にした。ロケバスに乗り込んで、まずは市内にあるD嬢のホームステイ先へ向かう。小雨が降り始めている。

午後二時半。D嬢のホームステイ先の家に到着。車を降りて呼びにい

くまでもなく、彼女はすぐに出てきた。フード付きのウインドブレイカーにジーンズといった出で立ち。チェッカーの駒みたいな動きで水溜まりを避けながら、小走りでロケバスに乗り込んでくる。近くで見ると、その表情は生氣を取り戻していた。体調について誰かが尋ねると、彼女は「もう大丈夫みたいです」とはにかみながら答えた。やはり私と同じく、アスピリンを飲んでしばらく眠ったら、嘘みたいに治ってしまったのだという。一体何だったんでしょね、と訝しげな顔をするので、「君のは知恵熱だよ」と茶化してやると、彼女は屈託のない笑い声を立てた。

降り続く小雨の中、ロケバスはアスマラ市の外れにある「戦車の墓場」と呼ばれる場所に向かっていた。マコーネン氏の話によると、そこ

にはエチオピア軍が残っていた数千台の戦車が集められ、静かに眠っているのだという。雨ざらしで、朽ちるにまかせた状態らしい。広島原爆ドームのように、戦争を忘れないためのモニユメントとして残してあるのかと尋ねると、マコーネン氏は不思議そうな顔でしばらく考え込み、

「違いますネ。しょうがなくてそこに置いてあるのです」

そう答えるのだった。本当なら解体して、新たな鉄板にでも加工したいところだが、エリトリアにはそんな技術も工場もない。しょうがなくて、朽ちるにまかせているのだという。無残な話だな、と私は思った。

やがてフロントガラスの向こうに、荒れはてた丘陵が見えてきた。大部分が岩地で、樹も草もほとんど生えていない。代わりに黒々と濡れそ

ぼった鉄の塊が、大地を押さえ込んでい。近づくとつれ、それらが戦車を二台三台と積み重ねた塊であることが分かってくる。見渡すかぎり戦車の死骸の山だ。何台あるのか正確には分からない、とマコーネ氏は言っていたが、確かにこんなものを数えようとは誰も思わないだろう。「墓場」ではなく、私は「死体置場」を連想した。丘陵には未だに、どこかしら血なまぐさい気配が漂っていた。結構な手間だろうに、わざわざ何台もの戦車を積み重ねるやり方には、復讐の気配すら感じられる。長い間自分たちの命をおびやかしてきた戦車を葬るにあたっては、できるかぎりの屈辱を与えてやりたい——そういう恨みの籠もった意識が、おそらくこの殺伐とした風景を創り出したのだ。

ロケバスの中は、急に静まり返った。誰も、何も言いたくなかったの

だ。自分たちは今、戦争の残骸に囲まれている——そう思うと、口が重たくなった。

やがて「墓場」への通用門らしきゲートが見えてくる。ロケバスはその前で停まった。傍らに建つ小さなプレハブは、守衛の詰所だろうか。その中から、誰かが現れた。迷彩服を着た兵士だ。彼は雨に濡れても一向に構わないといった足取りで、ゆっくりとロケバスに近づいてきた。助手席に座っていたマコーネン氏が慌てて窓を開け、現地語で何事か叫ぶ。兵士はそれを聞きつけて、助手席側に回り込んだ。そして窓から顔を突き出したマコーネン氏と、小声で言葉を交わした。兵士は野太い声をしていった。話の詳細は分からなかったが、彼が私たちに何かを強要しようとしていることだけは察せられた。しばらくするとマコーネン氏が

振り返り、車内の皆にこう告げた。

「車の中ですネ、見せろ言ってます」

同時に、私の席のすぐ横のスライドドアが勢いよく開いたかと思うと、いきなり黒人兵士が車内に身を乗り出してきた。迷彩服の柄が視界に飛び込んでくる。一番近くに座っていた私は、まともに顔を見合わせてしまい、思わず息を呑んだ。何しろ彼は大男だった。二メートル近いがっしりとした体軀で、肩からぶら下げた機関銃が小さく見えるほどだ。墨のような漆黒の肌をしていて、目も鼻も口も耳もすべてが大きい。しかしそれ以上に私を驚かせたのは、彼の両頬に三本ずつ刻まれた深い疵痕だった。鉤状の刃物で容赦なく抉られたような疵だ。彼は私のこわばった顔を一瞥すると、つまらなそうに鼻を鳴らし、車内をゆっくり見回し

た。一体何を点検しているのだろうか。人数と装備——おそらくはその二つだ。帰る時に人数が合わなかったり、「墓場」から何かを持ち帰って装備が増えていたりするのを防ぐために、点検をするよう命じられているのだろう。ほんの十数秒のことだったが、彼の出現によって、車内の空気は凍りついた。誰もが彼を、いや正確には彼の両頬の疵痕を見て、著しく緊張した。やがて彼は無言のまま二度頷くと、乗り出していた身を退いて、スライドドアを音高く閉めた。同時に車内の空気がふっと緩んだ。

「オーケーですネ」

マコーネン氏がそう言うのと、ロケバスはゆっくり走り出した。来た時と同じ足取りで、詰所に戻っていく黒人兵士の後姿が見える。彼は未だ



に戦時中を生きている人のように思えた。あの酷い疵痕は、やはりリンチの痕なのだろうか？ 車内の誰もがそう疑っているのを察してか、

「あの、今の兵隊の顔ですネ……」

とマコーネン氏は言いかけて、三本指で両頬を引っ搔く仕種をして見せた。

「……こうキズがついてましたネ。あれはですネ、西の部族のシルシですヨ」

氏の説明によると、エリトリア西部に棲む鬪争的な部族の男たちは、勇者の印として、頬に引っ搔き疵を刻む風習があるのだという。確かにあんな疵を両頬に刻んだ勇者たちが、何十人も横一列になって攻めてきたら、大抵の者は即座に逃げ出すだろう。

「やくざのイレズミと同じですネ」

とマコーネン氏は冗談のつもりで言ってくれたのだが、誰も笑えなかった。刺青とは比較にならないほどの苦痛が、あの疵痕からは想像される。或る意味、リンチよりも酷い風習ではないか。両頬にあの疵痕があるかぎり、彼は戦いの運命から逃れられないだろう。勇者の印は、永遠に戦い続ける者の印でもあるのだ。

ゲートを潜ってから一分も経たない内に、窓外に眺められる戦車の死骸の数が、圧倒的に増えてきた。雨に濡れた泥道の両側に、三台ずつ積み重ねられた戦車が群れをなしている様子は、悪意に満ちた壁を想わせる。眺めていると、また頭痛がぶり返してきそうだったので、私は目を閉じた。

ロケバスが停まったのは、「墓場」の中央にあたる位置だった。晴れていれば、この場所からは、遠くにかすむ岩山を背景に、打ち棄てられた戦車の死骸が点在する様子を見渡せるはずであった。最初に外へ出たカメラマンのA君は、私の方を向いて渋い顔をして見せた。車から降り、改めて周囲の風景を眺め回すと、私もA君と同じ渋い顔になってしまった。何度かここを訪れたことがあると言っていたD嬢も、いざ車外へと出てみるなり雨空を仰いで、顔を曇らせた。

「ちよつと雨が、あれなんですけど、一応ここで撮らせて下さい」

ディレクターのT君は申し訳なさそうにそう言って、手短で結構ですから、とつけ加えた。エリトリアに到着した当日から雨に邪魔をされて、撮影のスケジュールがタイトになってきたことを知っている私は、わざ

と道化した口調で承諾した。D嬢も、説明されるまでもなく事情が分かっているらしく、曇らせていた顔を急に明るくして、カメラの前に立ってくれた。

午後三時半。雨に祟られ、戦争に呪われた場所に立って、私とD嬢は「平和」について話し始めた。どこを向いても戦車の死骸が視界に割り込んでくるのに往生して、私はD嬢の顔をじっと見つめたままで話した。会話の主導権は最初から彼女の方が握っていた。良く言えば素朴な、悪く言えばガキみたいな疑問を私が口にするると、彼女はその十倍もの言葉で答えてくれるのだった。

「こんな戦争の残骸の中で、平和のかけらを探そうとするなんて、何だか皮肉な話ですよね……」

国連の平和活動の問題点について話している途中で、彼女はふとそんなことを言った。まったく同感だった。「戦争」はこんなにも具体的であるのに、「平和」とは何と抽象的なものだろう。話せば話すほど、「平和」の姿はかえって見えなくなってくる。私の話の中で唯一彼女が感心してくれたのは、

「戦争がドーナッツだとすると、真ん中の穴が平和なのかもしれないな」

という一言だった。しかしそれは、ちょっと気の利いた物のたとえ方をしただけで、実は何の答えにもなっていないのだと、私自身にも分かっていた。

午後四時。D嬢はまだまだ話し足りない様子だったが、繁くなってきた

た雨足のために、撮影は中断を余儀なくされた。正直、私はほっとした。急いでロケバスに戻り、雨ガッパを脱ぐ。軀は濡れてないのだが、服の方は下着まで湿っているように感じた。何もせずじっとしていると、その湿っぽさが募るばかりだ。私は車のサイドポケットに入れておいたスケッチブックを取り出し、今までに描いた何枚かの絵を改めて眺めた。ページを捲りながらふと顔を上げた拍子に、視界の片隅を何か紅いものがよぎった。

「花だ」

私は思わず口に出して言った。朽ちた戦車の群れの隙間に紅い花が一輪、雨に打たれて咲いていた。どうしようもない殺風景の中であって、そこだけ光が射すようだった。沈みがちな私を慰めるために、たった今

花を開いてくれたように思えた。私は無意識の裡にポケットに手を入れ、筆ペンを探していた。スケッチブックの白いページを開くと、自分に迷う暇を与えないよう、すぐさま筆を動かし始める。描いてみるとその紅い花は、添え木みたいに真っ直ぐで長すぎるくらいの茎に支えられていた。葉は花卉よりも大きく、茎の下の方に集中して生えている。その中にはおそらく幾つかの蕾が隠れているのだろう。しかし今、誰のためにか咲いているのは、茎の天辺の一輪だけだった。何という花なのか。私には分からなかったが、描く上では名前など知らない方が都合だった。こんなところに花が咲いている——それだけで十分だったのだ。

「……この雨は、止まないですネ」

フロントガラス越しに雨空を見上げて、マコーネン氏が呟く。私が花

のスケッチを終えるのを待っていたかのようなタイミングだった。氏の  
眩きを耳にして諦めがついたのか、ディレクターのT君は、

「引き上げましょう」

ときっぱり言った。ロケバスは何度か横滑りをしながら向きを変え、  
そろそろと走り出した。その後姿を、何千台もの戦車の死骸の中になっ  
た一輪咲いた紅い花が、じっと見つめていた。

この雨の中で、車の音を聞きつけたのだろうか、さっきの黒人兵士が  
ゲートに寄り掛かって、私たちを待っていた。ロケバスが停止すると、  
彼は先にゲートを上げてから、やはりゆっくりした足取りで近づいてき  
た。今度はマコーネン氏と話すこともなく、いきなりスライドドアを開  
けて、車内に首を突っ込んでくる。予期していたので驚きは少なかった



ものの、改めて間近に彼の顔を見るにつけ、両頬に刻まれた疵痕の生々しさが、私を胸苦しくさせるのだった。彼は血走った真剣な目をして、さつきよりもずっと慎重に車内を点検した。身を屈めて、私たちの足元を順に確かめていく。もちろん誰も、何ひとつ持ち込んではいなかったが、難癖をつけられそうな気がして、冷汗をかいた。私の後ろの座席を確かめようとして接近してきた時、彼の軀からは饅えた体臭が漂ってきた。戦争の臭いだ、と私は思った。そして反射的に息を詰めた。その気配を感じ取ったのか、彼は急に振り向いて、私と目が合うと、顔の中でそこだけ真っ白な歯を覗かせて、にやりと笑った。

「オーケー」

彼は言った。そして助手席のマコーネン氏に二言三言話しかけてから、

身を退いて、スライドドアを閉めた。間を置かずに、ロケバスは走り出した。振り返って確かめると、雨粒に覆われたリアウインドの向こうに、ぼうつと立ち尽くす勇者の影が見えた。一瞬、手を振っているように思えたが、私の目の錯覚だったのだろう。手を振って誰かを見送るような女々しい行為は、彼の両頬の疵痕が許すまい。あの勇者の印は、今までに何人の人間を彼に殺させたのだろうか。そんなことを私はほんやり考えていた。

午後五時。D嬢をホームステイ先に送り届けた後、私たちはホテルに帰った。全員が疲れ切っていた。すぐに部屋へ戻って着替えるつもりだったのだが、私は束の間ロビーで足止めをくった。到着の当日に町中のパールで見かけた二人の美女が、フロント脇のソファに座っていたので

ある。傍にいたマコーネン氏に、あの二人はこのホテルの客だろうかと尋ねると、彼はいかにも決まり悪そうに「あれはシヨウフですネ」と答えた。予想外だったので、私は少なからず戸惑った。と、そこへ壮年の白人男性がずぶ濡れで現れて、彼女たち二人を外へ追い立てた。まるで寸劇を観るかのようだった。

午後七時。電話が鳴って、私の浅い眠りを妨げた。受話器を取ると、ディレクターのT君の声が響いた。市内に一軒だけ中華料理屋があるので、晩飯を食いにいかないかという誘いだった。眠くて、私は不機嫌だった。ぶつきらばうな口調で断ると、人一倍気を遣うT君は、じゃあテイクアウトができれば何か買ってきますよ、と言って電話を切った。私は再びベッドに横になった。

長い一日だった。疲れ切った私に必要なのは、中華料理ではなく、深い眠りだった。